

本日の学び テーマ:「キリストを知るすばらしさ」 テキスト:フィリピ3章2-9節

【理解の手がかりとして】

本課のテキストの始まりは「あの犬どもに注意なさい」(3:2) とあるように、「警告」の色合いが強い。それは「安全」(3:1) を揺るがすような事態がフィリピ教会に起こっていたからである。それはパウロが教えた福音の真理を脅かす反対者の存在である。

パウロはその反対者のことを「犬ども」「よこしまな働き手たち」「切り傷にすぎない割礼を持つ者たち」(3:2) などと非常に厳しく呼ぶ。「注意なさい」「気をつけなさい」「警戒なさい」(原語では同じ動詞) と三度もその警告を発するほどに、その反対者たちの影響が案じられたのであろう。

これらの人たちは三種類の人たちではなくて同一で、それは「義」(救い、神との正しい関係) を、信仰と恵みとによってではなく、「律法の遵守」によって獲得できると考えるユダヤ主義の人びとのことであろう。「犬」は、ユダヤ人が異邦人や神に逆らう人びとに対して用いていた軽蔑語である。ここではパウロがそれを逆用して、皮肉を込めて論敵たちに向けている。

さて、「キリストを知るすばらしさ」というテーマから、「知る」ということについて考えてみよう。「知る」ということは「知られている」ということでもある。パウロは、ガラテヤ書4章9節でこう言っている。「今は神を知っている、いや、むしろ神から知られている」。

パウロは信仰に入る前には教会の迫害者として有名であった。多くのキリスト信者を捕えて獄につないだ人である。彼の以前のユダヤ的熱心さは5～6節に記されている通り。「神から知られている」——それは過去史の自分を全部ひっくりかえすものである。パウロは、以前にキリストを迫害した分だけ余計に、そんな自分をキリストが受け止めて下さったということを心から感謝しているのである。

そうしてパウロは全く変えられた。その日から、今までは大切だと思っていたものが自分にとっては不利益なもの、損なものだということが分かるようになった。パウロは3節で「キリスト・イエスを誇りとして、肉に頼らない」と言っている。「肉」とは「人間(性)」のこと。それに頼るとは、自分の力で自分を救うということ。ユダヤ教の文脈では「律法の行い」によること。肉を頼みとすることをパウロは人間の傲慢だと言いたいのである(自らの過去史を振り返りながら)。

キリストによって救われて神の恵み(一方的)の有り難さが分かってくるとその傲慢は崩される。パウロは徹底して崩されている。自分は割礼を受けているからとか、律法を行っているから心配ないとか、あるいは自分が熱心な人間だからとか、そんなことが救いをもたらすことではなく、ただ、キリストによって知られており、生かされていること、それに尽きるのだとパウロは言っているのである。そしてパウロは言う。「わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります」(3:9) と。

「律法」は、ユダヤ人にとっては、神様との関係が正しくあるための契約であった。それを守ってこうして生きてきた、それがユダヤ人の生き方である。パウロにおいても、かつてはその価値観で生きていた。そのパウロが、「ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました」(ローマ3:21) と述べる。これは大いなる転換、彼の「義」に対する認識の変革であった。

私たち人間の人生の至上の問題は、人はどうしたら神様との正しい関係(義)に入りうるかということ。

それはすなわち「どうしたら救われるか」ということ。ユダヤ教はそれに対して「人は律法のすべての規定を守ることによって神様との正しい関係に入ることが出来る。律法のすべての業を成就するなら、神様との正しい状態にある」と答える。しかしこれは、裏返すところ「誰も正しい関係に入ることにはできない」と述べていること。なぜなら誰も律法のあらゆる戒めを完全を守ることはできないからである。

それならば、人間はもはや神様との関係は遮断され、疎外されるしかないのか、・・・その深刻な問いに対して福音が響く。——「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ 3:16) これが新しい契約である。

相模中央キリスト教会の信仰は次のようである。

4. 人間と罪 ——「人間は、神ご自身にかたどって創造されましたが、与えられた選択の自由を用い、罪に堕ち、神に背くものとなりました。そのため人間は自らの力によっては、神の栄光を受けることが出来ません。」

5. キリストによる救い ——「救いは、人間の罪の贖いのため十字架にかけられ、三日目に復活された神の子イエス・キリストを救い主と信じるすべての者に与えられます。信じ、救われた者は、新生の恵みにあずかり、愛と喜びに生かされる者となります。」

フィリピ書のモチーフは「(福音信仰の)喜び」である。それが曲解して薄められず、奪われず、ひとすらに教会の表情であることをパウロは願っている。私たちの教会の表情も常にそうでありたい。

【聖書教育より】

「ここに登場する『キリストの真実による義』は、新教同訳聖書では『キリストへの信仰による義』と訳されています。しかしそれでは律法遵守がキリストを信じる信仰に変わっただけで、自分の努力によって義が獲得できると考える点では違いがありません。」(聖書の学び～キリストの真実による義)

——以下、先月のガラテヤ書のまなびから。『「イエス・キリストからいただく信仰」と理解したいと思います。・・・イエス・キリストからいただく信仰によってのみ、私たちは神の御前で義と認められるのです」(村瀬俊夫)という解釈は大いに合点がいく。「いただく」という理解が信仰の本質だと思うからである。信仰はいただくもの、まさに聖霊の結ばせる実である。「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えないのです」(一コリント 12:3)とあるとおり。